

教室(診療科)紹介(109)

チーム医療として機能する 病理診断を目指して

病院病理学講座 (大橋)

教授：高橋 啓
講師：大原関利章
横内 幸
医局長：大原関利章

大橋病院病理診断科の軌跡

大橋病院における病理診断学は1974年に産声をあげ、1979年4月に大橋病院病理部(大橋病院病理学研究室)として中央検査部から独立しました。そして、病院の発展と共に病理部も拡充が認められ1991年には大橋病院病理学講座へと昇格しました。直江史郎先生が初代部長として23年間病理部を統括された後、2002年4月から高橋 啓が2代目部長を務めています。現在、大原関利章講師、横内 幸講師、榎本泰典助教、そして社会人大学院生1名、非常勤指導医1名の計6名が医師として在籍しています。この内、



大橋病院病理診断科 高橋 啓

部長以下5名は病理専門医・病理専門研修指導医、細胞診専門医・教育研修指導医の資格を有し後進の育成・指導にあたっています。さらに、臨床検査技師6名、医療事務員1名が病理診断チームとして大橋病院の病理診断業務を支えています。

病院病理学講座における研究

私達の教室では、系統的血管炎、特に川崎病を主とする小児血管炎の病理、そして実験的血管炎モデルの解析を研究の軸として循環器領域の研究を継続しています。川崎病はその報告から半世紀以上を経た現在もなおいまだに原因不明の疾患であり、当教室に保存されている貴重な川崎病病理組織検体を用いて川崎病の病因、病態に迫る努力を続けています。一方、カンジダ菌体から抽出した糖タンパクをマウスに接種することにより冠状動脈を含む系統的血管炎を誘発させる川崎病疾患モデルを用いて、血管炎発症メカニズムの解明、そして新たな治療戦略を創造するための研究を行っています。このように人体病理と実験病理との2本立てからなる私達の血管炎研究は、今では国内外の施設から共同研究のオファーを数多く戴くようになりました。また、最近では学会、研究会を主催することも増え、2017年度は第37回日本川崎病学会学術集会、第22回日本血管病理研究会を主催し、第1回血管炎病因病態研究会を立ち上げました。さらに、2018年6月には第12回国際川崎病シンポジウムを横浜で開催します。この他、「厚労省難治性血管炎に関する調査研究班」に分担研究者として参加しているほか、日本病理学会や班研究事業としての病理診断コンサルテーションシステムに協力しています。

チーム医療としての病理診断

病理診断科における診断業務は組織診、細胞診、病理解剖に大別されますが、近年、生検・外科病理診断が占める割合が増しており、臨床医との密な情報交換が適確な病理診断のためにより一層重要となってきています。また、がん領域を中心として個別化医療推進のためのコンパニオン診断の重要性が急速に増大しており、2018年6月に開院する新大橋病院ではこれらのニーズにも対応できるよう新器材の導入と共に第三者機関による外部精度管理評価を受審し診断技術・能力の向上に努めています。一方、剖検数は1987年をピークに減少しており、近年の剖検率は12~15%を推移しています。画像診断をはじめ診断技術の進歩により病理解剖の位置付けが変貌している感は否めませんが、医学の進歩に果たす病理解剖の重要さは今も昔も変わることはありません。教育機関であることを念頭に剖検が果たす役割について理解を得る努力を続けていきたいと考えて



大橋病院病理診断科の仲間，2017年10月第37回日本川崎病学会学術集会にて

います。

病理診断を適切に行うためには臨床情報はじめ様々な視点からの総合的な判断力が求められますが、私達は患者さんの尊厳，プライバシーが遵守された上で情報が共有されるよう努力しています。医学生，研修医として病理診断科をローテーションしてくる若い方々に対してもそれを理解

して貰うと共に，目の前の一臓器に生じている病変にとらわれるのではなく，一人間に生じた疾患を系統的に考える思考ができるよう指導をしています。

(高橋 啓)

DOI : 10.14994/tohoigaku.2018-018